

〔直訳〕

35 そして 近づく 彼に ヤコブとヨハネが ゼベダイの息子たち、
言いながら 彼に、

「先生 私たちは欲している

ようにと あなたに私たちが求める何であれ

あなたが行く 私たちに」。

36 だが彼は 言った 彼らに、

「何を あなたがたは欲しているか [私に]

私が行う あなたがたに」。

37 だが彼らは 言った 彼に、

「あなたは与えよ 私たちに

ようにと 一人が あなたの右に そして 一人が 左に

私たちが座る あなたの栄光において」。

38 だが イエスは 言った 彼らに、

「あなたがたは知らない 何を あなたがたが求めているか。

あなたがたはできるか 杯を飲むことが、 私が飲むところの

あるいは 洗礼を、 私が受けるところの、 受けることが」

39 だが彼らは 言った 彼に、

「私たちにはできる」。

だが イエスは 言った 彼らに、

「杯を、 私が飲むところの、

あなたがたは飲むだろう。

そして 洗礼を、 私が受けるところの、

あなたがたは受けるだろう。

40 だが 座ることを 私の右に あるいは 左に、

私のものではない 与えることは、

そうではなく、それが準備されたところの者たちに」。

a'

b'

c

b

a

41 そして 聞いて

十人は 憤ることを始めた ヤコブとヨハネについて。

42 そして 呼び寄せて 彼らを、 イエスは 言う 彼らに、

「あなたがたは知っている 次のことを、

異邦人たちを支配すると見える人々は 尊大ぶる 彼らに

そして 彼らの大きな人々は 権力を振るう 彼らに。

43 だが このようではない あなたがたにおいて、

そうではなく 誰であれ 欲するなら

大きくなることを あなたがたにおいて、

その者はあるだろう あなたがたの 仕える者で、

44 そして 誰であれ 欲するなら

あなたがたにおいて 最初であることを、

その者はあるだろう すべての 奴隷で。

45 そしてなぜなら 人の子は 来たのではない 仕えられるために

そうではなく 仕えるために

そして 与えるために 彼の命を

買い戻し金として 多くの者の代わりに」。

〔新共同訳〕

35 ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」 36 イエスが、「何をしたいのか」と言われると、 37 二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」 38 イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。」

このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」 39 彼らが、「できません」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。 40 しかし、わたしの右や左にだれが座るか、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」 41 ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。 42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。 43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、 44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。 45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

a'

b

a

①構成

㉓ 35—40節

この段落は五つの部分に細分できる。35—37節(a)には「与える」「右」「左」「座る」が登場するが、これらの言葉は40節(a')にも現れる。38節(b)には「杯」「飲む」「洗礼」「受ける」が登場するが、これらの言葉は39節三行目以下(b')にも現れる。だから、この段落は、39節のcをはきんで、その前後をa(35—37節)とa'(40節)、b(38節)とb'(39節三行目以下)とが対応するような構成となっている。このような構成によって、イエスはヤコブとヨハネの視線を、aに描かれる栄光からbに描かれる十字架へと引き戻そうとしている。

㉔ 41—45節

この段落は三つの部分に分けられる。41—42節では「異邦人たちを支配すると見える人々」の態度を述べ、その特徴を「尊大ぶる」「権力を振るう」ことだとしている。これとは対照的に45節は「人の子」の態度を述べ、その特徴が「仕える」「与える」にあると教える。両者の間の43—44節では、「あなたがたにおいて」が三度繰り返され、あなたがたの態度がテーマとされている。41—42節で異邦人の態度を述べた後に、「だが」で始まる43—44節があなたがたの態度を説き、「なぜなら」で始まる45節はそれを根拠づけるために、人の子の姿勢を語る。

②栄光の座(35—40節)

㉕ a 「イエスの右と左に座る」

10章32節で、弟子たちはエルサレムへと先頭に立つて歩むイエスを見て恐れる。驚き、恐れる弟子たちにイエスは三度目の受難予告を語る(33—34節)。この受難予告に続く出来事として、ヤコブとヨハネの願いが語られる。彼らはイエスの左右の座につく栄光を手にとりたいと願う。彼らのこの願いには栄光を追い求める人間的な感情も含まれるだろうが、イエスの栄光を信じ、誰よりもそのイエスのそばにいたいと願う純粋さも含まれていただろう。

㉖ b 「私たちはできる」

ヤコブとヨハネは、38節で苦難を耐えることができるかと問うイエスに、「私たちはできる」と誓っている。二人はエルサレムで待ち受ける運命の厳しさを耐えねばならないと気づいているのだろう。だからこそ、彼らは栄光を求めている。苦難は覚悟するが、その後には栄光が待っているほしい。そうでなければ、苦しみは無駄である。栄光の座に座るイエスの隣にすることができると保証されるのでなければ、苦難を乗り越える勇気が失せる。彼らにとって、苦難そのものは無価値なものにすぎない。だから、彼らの視線は苦難を飛び越えて、栄光へと向かう。

㉗ c 「私が飲む杯」「私が受ける洗礼」

この二人に対して、イエスは38—39節で「私が飲む杯」と「私が受ける洗礼」に言及する。ここでの「杯」とか「洗礼」は、神が定めた苛酷な運命の象徴である。イエスはヤコブとヨハネの視線を栄光の手前の苦難へと引き戻そうとしている。イエスは「私が飲む杯」「私が受ける洗礼」というように、「私」と苦難との結びつきを強調している。このように強調するのは、苦しみを避けるなら、イエスに従うことにならないからである。

㉘ d 「それが準備されたところの者たち」

栄光の座は「それが準備されたところの者たち」に与えられる。「準備された」は受動形であるが、これは「神が準備する」を婉曲的に言い表す受動形と見ることができ、栄光の座につかせ

るのは神である。だから、苦難が必ず栄光をもたらすとはかぎらない。それは神が決定することである。こうして、苦難と栄光との必然的な連関が否定されるが、それは裏返せば、苦難はそのままで価値を持つということでもある。

③弟子が取るべき態度(41―45節)

①「異邦人たちを支配すると見える人々」

この段落では異邦人の生き方(42節)と人の子の生き方(45節)とが対比される。異邦人は、高い地位と権力を目指して生きる。しかし、彼らの支配は「支配すると見える」にすぎない。それは見せかけの支配にすぎず、真の支配でない。

②「仕えるために」

一方、人の子が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためである。その極みが、45節に語られる十字架の死である。この死は「多くの者の代わり」の死であり、罪の奴隷状態から私たちを贖う「買い戻し金として」の死である。

③この対照的な二つの生き方の間に、弟子が取るべき態度を語る43節がはさまれている。その冒頭の「だが」が示すように、弟子は異邦人のようであってはならない。「あなたがたにおいて」は、偉大さは人を支配する力ではなく、人に仕える謙虚さにある。異邦人、つまり神に出会っていない者は、権力を振るうことを栄光と考える。しかし、イエスを知った者は、仕えるという道に従う。「なぜなら」、イエスは十字架に上ることによって、すべての人に仕えたからである。

④苦しみの意味

①二つの段落は、元来は別々であったが、マルコがそれを結びつけたのかもしれない。そうであれば、マルコは栄光を「仕える栄光」と捉えているのだろう。前半の段落(35―40節)では、ヤコブとヨハネの目を栄光から苦難へと引き戻すことによって、また後半の段落(41―45節)では、異邦人の生き方とは対照的に人の子の生き方を述べることによって、弟子たちの栄光はイエスと共に十字架を担うことにある、と説いている。

②最初の受難予告は、ペトロの信仰告白の後に置かれている(831)。このときペトロはイエスをいさめ、イエスから「私の後ろに退け」と叱られる。そして、イエスは「自分の十字架を背負う」ようにと命じ、人の思いではなく、神の思いに従うことを求める。その六日の後、イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて、高い山に登り、栄光の姿を垣間見させる。受難の後に復活の栄光が続くことをイエスは知らせるが、弟子たちの目は受難から離れ、栄光に向かっていく。

③二度目の受難予告の後でも「誰が一番偉いか」をめぐる弟子たちは論じ合っていた(934)。そして、三度目の受難予告の後には、ヤコブとヨハネが栄光の座を求め、受難予告の直後に二度にわたって、マルコは弟子たちの態度を描く。それはエルサレムが近づいても(32節)、弟子たちの誤解は消えないばかりか、むしろ大きくなっていることを示しているのかもしれない。

④イエスが人々に「仕えて」十字架に上ったのは、天の栄光を得るための条件だからではない。イエスは栄光が欲しくて「仕えた」のではなく、「仕える」ことそのことに意義があるからである。イエスが「仕える」者として苦しみを受けたのは、それが神の望みだからである。イエスが人々に「仕えた」のは、すべての人が生きること願う神の望みを現すためである。